

一宮市山中遺跡出土の石器について

金子 健一

I

今年度の一宮市・山中遺跡の調査では、弥生時代前期における多数の石器及びその関連資料を得ることができた。原石から石鏃、石斧等の製品に至るまで、石器製作の全工程を示す資料が出土しており、その総数は3553点にのぼる。これに昭和56年に実施された2次調査時の資料（岩野・赤塚1982）も含めると、製品110点をはじめとして合計3800点余にもなり、資料不足がいわれて久しい一宮市周辺の当該期の遺跡の中では、質量ともに最も充実したものといえよう。現在、資料整理の緒についたばかりであり、一定の成果を公表できる段階ではないが、中間報告という形をとり、資料を概観しつつ若干の問題提起を行っていきたい。

II

先に述べたように、製品は2・3次調査あわせて110点出土している。その器種構成は表1⁽¹⁾の通りであるが、その大半は、今年度確認された弥生時代前期の中でも新相、水神平期に属するもので、石器製作関連遺構（SK32、50、57、75）や、居住域と墓域を画する溝（SD56、62）、住居跡周辺、方形周溝墓の周溝中から、条痕文の煮沸具、遠賀川式土器の貯蔵具とともに出土している。石鏃の中には、縄文的な形態を示すものもわずかではあるが認められることから、古相（檜王期）に属するものも含まれているようであるが、遺構出土で土器を伴う明確な資料は得られていない。

石鏃 凹基のもの（1～11）が最も多く、鏃身と基部の形態により細分が可能である。小型から中型品が多く、無茎のものが圧倒的に多い。凸基のもの（11～13）は、中型、大型品が多いが、有茎・無茎の区別が明瞭でなく作りも全体に粗雑である。平基のもの（14～17）は、凹基のものに次いで多いが、中型品が多く、凹基とは逆に有茎のものが多数を占めている。円基のもの（18、19）は図示した2点のみが出土している。なお、石鏃全体では有茎、無茎のものが同数となっている。

石錐 5タイプの石錐（20～24）が1、2点ずつ出土しており、目的別に使い分けていたものと考えられる。

石斧 磨製のは、蛤刃石斧が1点出土している他は、偏平片刃石斧（25）と柱状片刃

石斧（26）がほぼ同数出土している。25は小型品で木器加工用の可能性もある。28は棒状の石斧で三河地域で見られる形態である。打製のものは9点出土しており、33のような一般的な形態のもの他に、34のような礫の大型剥片の縁辺に調整加工を加えた、石庖丁とも考えられるものも含まれている。

その他 30はサヌカイト製のスクレイパー。31は縦長の剥片の縁辺に調整加工を加え、両端に半円の抉りを入れた不定形刃器である。32は形状は石庖丁であるが、刃に意図的な刻み目が入っており、別の用途も考えられる。岐阜県関市の大杉遺跡で類例が出土している。

III

縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての当地方における石器組成についての研究は、石川日出志氏が伊勢湾岸地方という広い視野から、各遺跡の比較・検討を行い、低地型・台地型石器組成を提唱されたのが最も最近の成果といえよう（石川1988）。その中で氏は一宮周辺の弥生時代前期の3遺跡（元屋敷・弥勒・二タ子）をとりあげ、その石器組成の中にみられる「打製石鎌と打製石斧の卓越」が、「犬山扇状地から東濃地方の河岸段丘や丘陵上に立地する遺跡」の組成と共通する事実を指摘し、それを「台地型石器組成」と呼称された。しかし、氏も述べておられるように、当時、一宮周辺の当該期の遺跡の調査例は乏しく、傾向を把握するにも資料の絶対数が不足していたことは否めない。その後、大きな状況の変化はなく、新たな見解も出ていない中で、今回の山中遺跡の資料はどのような位置づけがなされるのであろうか。

今年度の調査における石器の器種別点数、及び各々の占有率は表1の通りであるが、これらのデータから以下の点が指摘できるのではないだろうか。まず第1点は、「台地型石器組成」の一つの特徴である打製石鎌の卓越であり、約62%と高い占有率を示している。次いで多いのが磨製石斧類であり、約13%を占め

大別	器 種				点 数		占有率		全体
							器種内訳		
A	石 鎌	Ⅰ	凸 基	a 有茎	8 (5)	10(7)	11.8	14.7	61.8
				b 無茎	2		2.9		
		Ⅱ	凹 基	a 有茎	8	33(32)	11.8	48.6	
				b 無茎	25(24)		36.8		
		Ⅲ	平 基	a 有茎	15(14)	19(18)	22.1	28.0	
				b 無茎	4		5.9		
		Ⅳ	円 基	2	2.9				
			不 明	4	5.8				
			小 計	68(63)	100				
C	打 製 石 斧				9 (8)			8.2	
D	石 庖 丁 (磨 製)				1			0.9	
F	磨製 石斧	Ⅰ	偏 平 片 刃		4		28.6	12.7	
		Ⅱ	柱 状 片 刃		5		35.7		
		Ⅲ	太 型 蛤 刃		1		7.1		
		Ⅳ	その他・不明		4		28.6		
G	石 鎌	TypeⅠ			2		22.2	9.1	
		TypeⅡ			2		22.2		
		TypeⅢ			2		22.2		
		TypeⅣ			2		22.2		
		TypeⅤ			1		11.1		
		ス ク レ イ パ ー			1				
H	石 鎌			1			7.3		
	敲 石			2					
	不 定 形 刃 器			5 (2)					
合 計					110			100	

表1 山中遺跡2・3次調査出土石器組成
()内は今年度調査出土点数

るが、これに対し、打製石斧の占める割合が8.2%と必ずしも多数派ではなく、組成を特徴づける程大きな存在にはなっていない点が「台地型石器組成」と最も大きく異なる部分である。そして、各種加工具である石錐が8%存在することも含めて考えると、山中遺跡の石器組成は、同じ一宮周辺に位置する縄文時代晩期後半の馬見塚遺跡F地点(澄田ほか1970)、及び弥生時代前期を主体とする朝日遺跡貝殻山地点(柴垣ほか1972)のそれと最も類似することが指摘されるのである。また、これに似た組成は、絶対量が不足しているものの、山中遺跡の南に位置するほぼ同時期の二タ子遺跡(澄田ほか1967)⁽²⁾でも認められることから、敢えて極論すれば、一宮市周辺における弥生時代前期の遺跡の石器組成は、縄文時代晩期後半の馬見塚F地点の段階、すなわち、打製石斧激増の前段階⁽³⁾の石器組成と大きな差異はなく、むしろそのまま石包丁や磨製石斧が安定的に存在する弥生的な低地型石器組成へ移行してゆく過渡的な様相を呈しているといえよう。このことは、一宮市周辺の弥生時代前期の遺跡から縄文的色彩を濃く残す削痕を施した土器が出土することからも推察できるのであり、今回の山中遺跡においても、前期の中で削痕土器が大部分を占める段階(樫王期)から、削痕・条痕文及び遠賀川式土器が共伴する段階(水神平期)へという流れを追うことができる。そうした意味からも、今回出土した石器の大半が水神平期に属するものであることは、非常に示唆的であり、一宮周辺においては土器の変化と軌を一にするように石器組成の面でも縄文時代晩期後半の枠組を受け継いでいる可能性が高いと考えられるのである。とすれば、縄文時代晩期後半から条痕文期の間に石川氏のいわれる五貫森遺跡や里原遺跡のような打製石斧の激増する時期が当地域に存在した可能性は極めて小さいといえよう。

以上、石器組成について思いつくまま述べてみたが、まだこの他にも検討すべき点はあまりに多い。例えば、比較検討すべき遺跡数が十分でないのはもちろん、伴出土器や石器の器種ごとの詳細な分析が不足しており、生業パターン等の具体的な考察は見送らざるを得なかった。また、今回は取り上げなかったものの、石材の問題は非常に大きく、製品の80%前後、製作過程資料のほぼ100%を占めるガラス質石英安山岩(下呂石)の円礫は、その採集地点や供給体制、ルート等の詳細な検討が不可欠であり、製作技術や製作体制とあわせて、今後の大きな課題となることは間違いないであろう。

文末ではあるが、この小文を成すにあたり、加藤安信、森勇一、赤塚次郎、石黒立人、伊藤隆彦、楯真美子の各氏には数々の有益な御助言を頂いた。また、遺物の実測、トレースにあたっては日栄智子氏(南山大学学生)の御協力を得た。記して感謝する次第である。

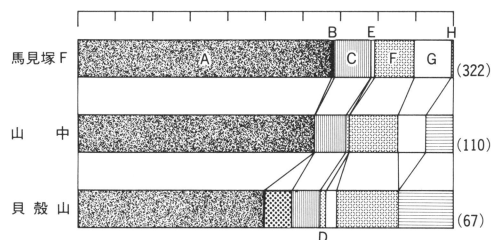
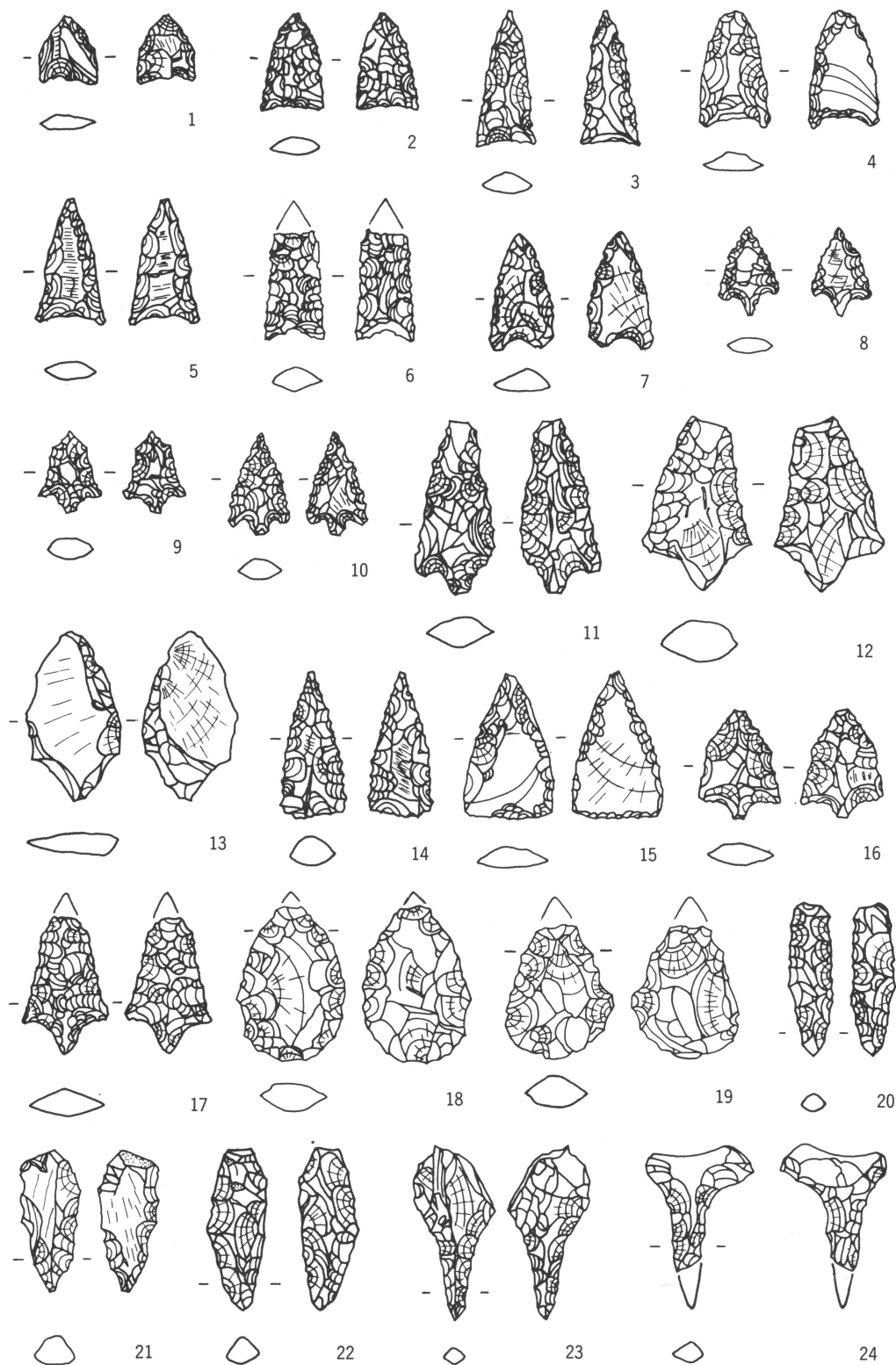
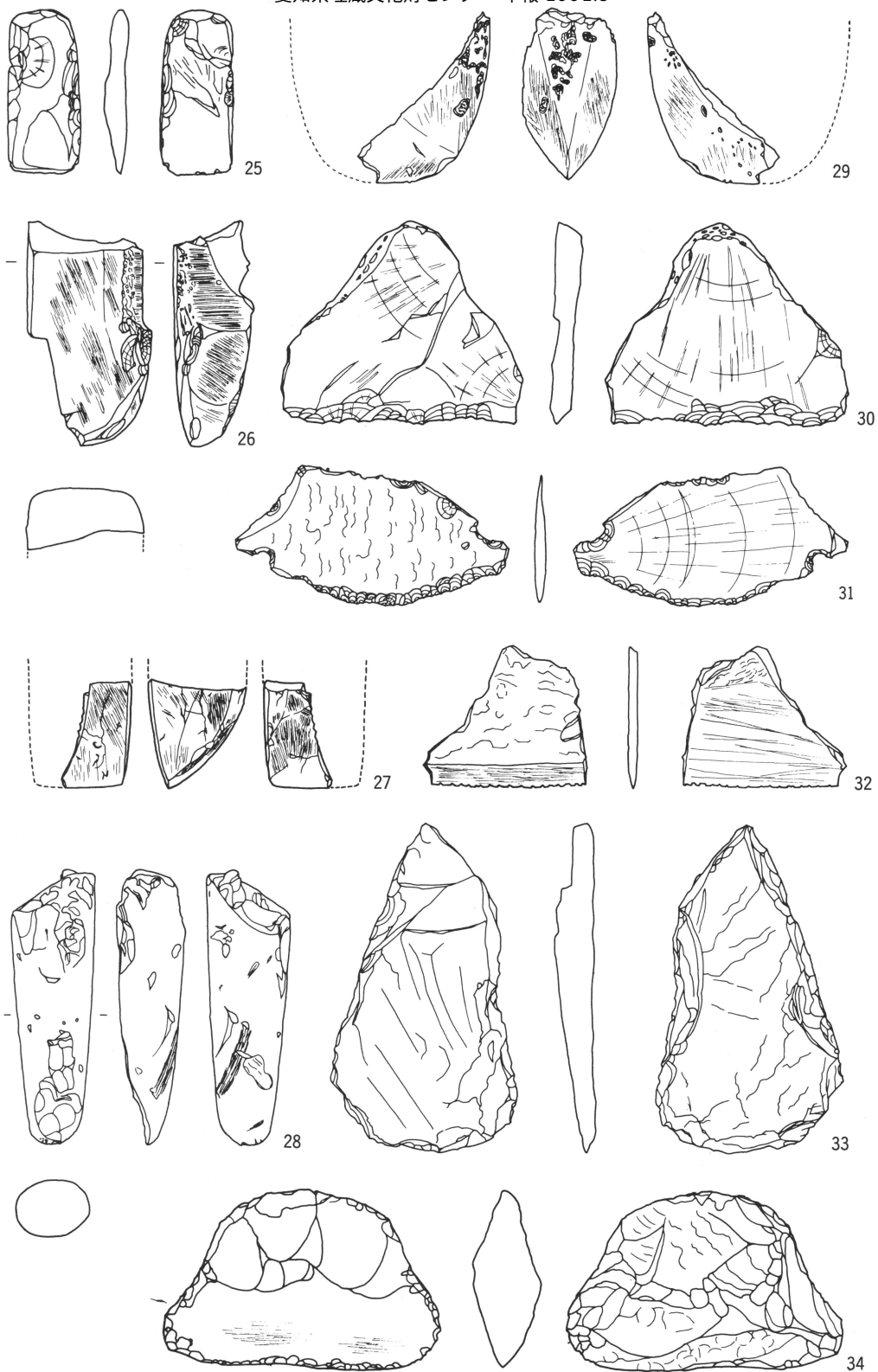


表2 縄文時代晩期・弥生時代前期石器組成
(石川日出志氏原図に加筆)



第1図 山中遺跡出土石器(1)



第2図 山中遺跡出土石器(2)(25~33はⅠ:2、34はⅠ:4)

註

- 1) 表1中の石器の大別は、石川日出志氏がかつて提示(石川1988)されたもので、使用目的別にA狩猟具、B漁撈具、C土掘り具、D農具、E食料加工具、F木工具、G各種加工具、Hその他となっている。本稿においても、他遺跡との比較検討を行う関係上、そのまま使用させていただくこととした。
- 2) ニタ子遺跡では、発掘及び採集による36点余の石器が知られており、A26点以上(72%) C1点(3%)、E2点(5.5%)、F5点(13.9%)、G2点(5.5%)という組成を示している。
- 3) 打製石斧の増加は、縄文時代晩期における西日本共通の現象であるが、石川氏は伊勢湾沿岸においては「馬貝塚F地点の年代幅のなか」で増加が進展した可能性を指摘されている。

参考文献

- 1) 岩野見司・赤塚次郎 1982『尾張病院山中遺跡発掘調査報告』一宮市教育委員会
- 2) 石川日出志 1988「伊勢湾沿岸地方における縄文時代晩期・弥生時代の石器組成」『<条痕文系土器>文化をめぐる諸問題』愛知考古学談話会
- 3) 澄田正一、大参義一、岩野見司、1967『新編一宮市史』(資料編1)一宮市
- 4) 柴垣勇夫、伊藤 稔ほか 1972『貝殻山貝塚調査報告』愛知県教育委員会

番号	器 種	出土遺構	長(cm)	幅	厚	重(g)	石 材	備 考
1	凹基無茎式石鏃	S K50	1.3	1.1	0.3	0.37	真岩	
2	同上	S K41	1.9	1.2	0.35	0.66	チャート	
3	同上	S D62	2.6	1.2	0.35	0.81	ガラス質石英安山岩(下呂石)	
4	同上	検出	2.2	1.3	0.35	1.00	真岩	
5	同上	S K19	2.4	1.3	0.35	0.89	真岩	
6	同上	S K75	(2.1)	1.1	0.4	(0.99)	チャート	
7	同上	S K38	2.3	1.2	0.4	0.98	ガラス質石英安山岩(下呂石)	
8	凹基有茎式石鏃	S K75	1.7	1.1	0.3	0.40	同上	
9	同上	S K75	(1.6)	1.2	0.35	0.51	チャート	
10	同上	S K75	2.0	1.2	0.35	0.58	ガラス質石英安山岩(下呂石)	
11	同上	S K57	(3.3)	1.5	0.6	(2.16)	同上	
12	凸基有茎式石鏃	S D48	3.3	2.1	0.8	(3.55)	同上	
13	同上	S D49	3.2	1.8	0.5	2.43	同上	未成品か
14	平基式石鏃	S B19	2.8	1.2	0.6	1.44	同上	
15	同上	検出	(2.8)	1.7	0.4	1.32	同上	
16	平基有茎式石鏃	S K36	(2.1)	2.6	0.4	0.96	同上	
17	同上	検出	(2.1)	1.6	0.5	(1.26)	同上	
18	凹基式石鏃	検出	(3.1)	2.2	0.6	(3.56)	同上	
19	同上	S D48	(2.6)	2.1	0.5	(2.37)	同上	
20	石錐(Type I)	検出	2.9	0.9	0.4	1.11	同上	
21	同上(Type II)	検出	2.7	1.2	0.6	1.71	同上	
22	同上(Type III)	S Z01	3.1	1.2	0.6	1.93	同上	
23	同上(Type IV)	S K32	3.3	1.6	0.9	2.87	同上	
24	同上(Type V)	検出	(2.4)	2.0	0.6	(1.59)	同上	
25	偏平片刃石斧	S D61	5.1	2.2	0.75	14.26	緑色岩	
26	柱状片刃石斧	検出	(6.9)	(2.5)	(3.6)	(65.41)	真岩	
27	同上	検出	3.4	2.1	3.0	(21.86)	真岩	
28	磨製石斧	検出	(8.5)	2.6	2.1	(51.80)	砂岩	
29	大型蛤刃石斧	S D62	(5.3)	(4.1)	(2.9)	(39.12)	硬砂岩	
30	スクレイパー	検出	6.2	7.5	1.4	51.77	サヌカイト	
31	不定形刃器	S K32	8.5	4.3	0.4	16.29	同上	
32	石庖丁	S Z01	(5.1)	(4.3)	0.4	(11.84)	真岩	刃部に刻み目あり
33	打製石斧	S E01	10.1	5.9	1.2	77.23	片状ホルンフェルス	
34	同上	S B19-S K01	17.1	11.1	4.2	706.0	砂岩	石庖丁の可能性もあり

表3 山中遺跡出土石器一覧表(()内は残存値)